

チョコセンヲカケル！

ワタシガイチバン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイビスサマーダッシュ

それは新潟で行われる中央競馬唯一の芝1000m直線の重賞レース

スタートからゴールまで真っ直ぐに走るレースでそこにはカーブや障害物などは存在しない

求められるのは全力で走り抜ける事だけだ

そんな世界に君は挑戦した

18人が一斉にスタートをする中で君は観客に近い外ラチを走り先頭に立った

まるで自らがこのレースの王であると主張するかのよう

そしてゴールし、見事勝利した

その時観客は真夏の熱気を吹き飛ばすように新たな王の誕生を祝った

王の名は「ライオンボス」

目次

1話	選抜レース	1
2話	カルストンライトオ	6
3話	スカウト	12
4話	チームスピカ	19
5話	特訓	27

1話 選抜レース

テレビに映し出されているのは香港のレースだ。普段では海外のレースはテレビ中継をやらないが今回は日本のウマ娘が出走しているというので中継をやっている。

黒を基調とした勝負服で金色の流線が散りばめられた黒髪のウマ娘だ。

『さあ前までは3バ身ある！走れ！走れ！』

実況でアナウンサーはそのウマ娘を応援するかのようにつぶ。

テレビでそれを固唾を飲んで見るウマ娘がいる。

実況の興奮が移ったのか栗毛のツインテールを上下に揺らしながら。しかし、声は上げなかった。

そしてゴール板目前で

『走れ！走れ！差し切ったー!!!』

黒髪のウマ娘は最後200mで前を捉え切り見事な差し切り勝ちをした。

画面に映し出されているウマ娘は客席の歓声に応えるかのように静かに手を挙げた。

「カッコいい……」

張り詰めた感覚は途切れたのか一言声が漏れた。

「私も…なりたい…この人みたいに強くてカッコいいウマ娘になりたい…!」

レースの興奮は醒めやまないウマ娘、ライオンボスに一つの目標が出来た。

あのウマ娘みたいになりたいと。あの日そう誓った。

~~~~~

あれから月日は流れて5月のトレセン学園。

入学式、クラスでの自己紹介、学園案内など目まぐるしい勢いで時は流れてそれが落ち着いた。

入学を終えた学生は選抜レースに出走し、チームやトレーナーにスカウトされる。クラスの半分が選抜レースを勝つたり好成績を残しスカウトされている者もいれば中には勝てずにスカウトされてない者もいる。

ライオンボスは後者に分類されている。同級生や級友はみんなスカウトされていく中自分だけが取り残されている。

そして今日も選抜レースに出走する。トレセン学園内のレース場、ダート1200mだ。

ライオンボスにとってこのレースは3回目だ。何故なら入学してすぐに実施した選抜レースで優秀なウマ娘はすぐにスカウトされる。

そうなるとその後に実施される選抜レースに出るのはその残りのウマ娘だ。その中で実力のあるウマ娘がスカウトされれば残るのは実力不足のウマ娘だ。

今までであれば1着を取れなくても掲示板内、または好走していたウマ娘が選ばれたが2回目や3回目と回数が増えれば話は別だ。

その中で1着を取らなければもはや中央では通用しないのだ。そうなれば地方、はたまたレースに出ることすらできずに普通の学校へ行くことになる。

ライオンボスとしてもそれだけは避けたい。何故なら彼女にはなりたいうマ娘がいる。そのウマ娘になるためにはこのレースに勝たなければならぬ。

(絶対に勝つ……小さい頃テレビで見たウマ娘みたいになりたいんだもん！)

気合を入れるため両手で頬つぺたを叩きゲートインした。

そしてゲートが開きスタートした。

結果は5着となった。最初好スタートで先行したもののカーブへ入るとそのスピードは衰え最後差し切り勝ちを許してしまった。

1着のウマ娘はトレーナーに話しかけられている。しかし、2着以下のウマ娘にはそれはないためみんな静かに去っていく。中には悔しくて涙を流すウマ娘もいる。

「……………ハア……」

またダメだったかとライオンボスはため息をついた。悔しさはある。しかし、何故か涙や怒りと言った感情は不思議と生まれなかった。焦りはあるのに何故かそれらの感情は出なかった。

「また明日も選抜レースかあ……次は……あるのかなあ？」

そんな言葉が自然と溢れた。それもそのはずだ。何故なら彼女はこれまでダートの1300m、1700mを出走したが結果はどれも3着以内はおろか掲示板外だ。

今回距離短縮で1200mに出走した。結果は今までの2戦と違い掲示板内には入ったがそれはこのレースでは意味がない。

「明日先生に聞いてみよ……」

トボトボとライオンボスはレース場を後にした。

このレースを遠目で見ているウマ娘がいた。長い黒髪に白い前髪が特徴のウマ娘だ。「おハナさんとこのライトじゃないか。何してんだ？」

チームスピカのトレーナー、沖野Tに呼ばれて彼女は振り向いた

「随分と熱心に見てるようだが、レースでお眼鏡に叶う子はいたのか？」

「……トレーナーの貴方がウマ娘の私に聞きます？」

「いやあ……ちよつとチームの奴らのトレーニング見てたら選抜レース見るの忘れちゃつ



てな……」

「はあ……まあ一人はいますが……」

「へえ。日本最速と名高いライトが目をつけるとは余程の実力者なのか？だれなんだ？」

「……………そうですね……名前は明言しません。ですが明日になればわかりますよ」

彼女は悪戯な笑みを沖野Tへ浮かべて言った。

「……………へえ。明日じゃあ見に行こうかねえ。明日の選抜レースは確か……」

「ダート1000mです。明日もまたここで会いましょう」

「お、サンキューな。じゃあまた明日な」

二人はそう言っただけで別れた。

黒髪を靡かせるウマ娘、カルストンライトオはターフを見つめながら

「あの子は……私が予想してる以上の逸材。だからこそスピカのトレーナーに見て欲しいんです……私の予感が正しいのか……そして私の構想を叶えるウマ娘なのかを……」

そう呟いた。

## 2話 カルストンライトオ

選抜レースの次の日。ライオンボスは教室でクラスメイトと話している。今は昼休憩中だ。

「さつき先生に相談したの。次の選抜レースはありますかって。そしたら次が開催されるかはわからないってさ」

「そうなんだ…まあでもまだまだやるんじゃないや、あつ。ウマッターの通知来た」

ライオンボスと同じ栗毛のウマ娘はスマホを開いて何かを打ち込む。

「もう……人が悩み相談してるのにウマッターって…」

「私かなりフオロワーいるんだ。こないだのレースの戦法をウマッターで募集してそれで一番投票された戦法で走ったら勝ったんだよ！すごくない？それでねー」

彼女のウマッター自慢が始まった。偽物を疑われるから名前の後に（本人）って書いてるのがフオロワーに受けただのフオロワーから送られた犬の写真が可愛いなどだ。ライオンボスは少し呆れながら聞いていると向こうから栗毛に青いエクステをつけたウマ娘が近づいてくる。

「……ライオンボス。今、いい？」

「あ、カポちゃん？どうしたの？」

「…生徒会の、カルストンライトオさんが呼んでる」

「カルストンライトオってあの生徒会書記の？」

カルストンライトオを知らないウマ娘はいない。なぜならスプリント路線で活躍してるウマ娘で、日本最速のウマ娘と言われているぐらいの脚力を持つ。現在はレースにはあまり出ずに生徒会の書記として活動している。

そんな人から呼び出しを受ける心当たりのないライオンボスは少し首を傾げカポちゃんに聞いた。

「なんで呼んでるか聞いてるカポちゃん？」

「わからない……ただ来て欲しいって」

不思議に思いながらライオンボスは座ってる席から立ち上がる。

「ボス、なんかやらかした系？」

「わからないけど…アフちゃん。また後でね」

あいとアフちゃんと呼ばれたウマ娘、アフリカンゴールドはまたスマホに目線を写していじり出した。

「カポちゃん、ライトオさんはどこにいるの？」

「…多分生徒会室」

「ありがとう！じゃあ生徒会室に行ってみるね！」

ライオンボスは教室を後にした。

ライオンボスは生徒会室に着いて扉をノックして入った。中に入るとそこにいたのは椅子に座ったカルストンライトオがいた。

「あの、ライトオさんに用件があつて来ました」

「ライオンボスさんですね。お待ちしてました。そちらへ座ってください」

失礼しますと一言言つてライオンボスはカルストンライトオに向かい合うように座った。

「ライオンボスさん。今日選抜レースを行いますのでそちらにエントリーしてください」

ライオンボスは驚いた表情をしながら

「え？次の選抜レースの予定はまだ決まつてないと聞いてますよ？」

「ああ。今回急遽入れたんですよ。まあみんなには後でお知らせが来ると思います」

「はあ……でもなんで私だけに直接話すんですか？」

「…………ライオンボスさん。それは私がこのレースに貴方が勝てる確信してるからです」

「ど、どういう事ですか？ 私今までの選抜レース勝ててないですよ？」

カルストンライトオはクスリと笑う。

「今回の選抜レース、何mだと思います？」

「……………1200mですか？」

「いえ1000mです」

「1000m…………？」

「はい。今回から試験的に始めてみようかと思いましたが」

「それがなんで私が勝つ理由になるんですか？」

カルストンライトオはタブレットを取り出して言った。

「これまでの貴方のレースはスタートと同時に先頭に出る逃げのスタイルでやってきましたね。ですが、カーブを曲がり始めると失速する。何故ならそこまででしかスタミナが持たない。ですよね」

ライオンボスはチクリと痛い所を突かれた。自分でも自覚はあるからだ。

「ですがそれは1200mの話。もし1000mなら貴方はスタミナを保ったまま逃げ切れるんですよ。貴方のスタートダッシュの良さや直線のスピードは正直に話せば重賞ウマ娘と同じ実力があると私は考えてます。だから勝つと考えてます」

「……………私にそんな力が？」

「自分の実力は案外自分では把握していない部分もありますから」

「じゃ、じゃあ私ももしかしたらスカウトされる可能性も!?」

「……………結果を出せば、ですよ。ライオンボスさん。今日の選抜レース、全力を出してください。私は応援してます」

ライオンボスが生徒会室を出た後入れ違いでシンボルドルフが入って来た。

カルストンライトオは窓から校庭にあるレース場を眺めていたがその視線をシンボルドルフへ移した。

「カルストンライトオ、さっきの子は？」

「……………ああ、あの子は私に用事があったて来ただけです。と言っても大した話ではありません」

「そうなのかい？にしてもかなり嬉しそうな表情だったが……」  
「軽い雑談をしてただけです。気にしないでください」

わかったとシンボルドルフは返事をして会長席へ座って書類に目を通した。しかし、あまり集中出来なかった。理由はさっき生徒会室を出たウマ娘が気になっていたからだ。

(……………あの子はカルストンライトオの知り合いなのか?にしてもあまり見かけないウマ娘だったが転入生か?だとしたら私の耳に入るはずだが……)

そんなシンボリルドルフをカルストンライトオは横目に見た。

(私の計画、あまり表に出したくありませんので会長には嘘をつきましたね……まあ、会長の手を煩わせたくありませんから仕方ありません。彼女は“私達のようなウマ娘”にとつての光になります……海外にいるあの子もですが……)

### 3話 スカウト

カルストンライトオと生徒会室で会ってから時間が経ち放課後になった。

トレセン学園内にあるレース場の観客席にはトレーナーがちらほら集まっている。その中に沖野トレーナーがいた。

「ライトオが観に来て欲しいと言ったから来てみたが……」

コースを見てみると体操服を着たウマ娘達がぞろぞろ出てきた。

「選拔レースが開催されるからこいつて事か？にしてもこの時期でスカウト待ちじゃあまり期待は……」

「出来ない、ですか？」

後ろから声をかけられた沖野トレーナーは振り返ってみるとそこにはカルストンライトオがいた。

「いつからいたんだ？」

「ついさっきですよ。少し寄り道してましたので」

「にしても選拔レースが開催されるって聞いたのは突然だったな。普通は朝から告知されるものが昼に急にするって聞いたからさ」



「これでも早めにはしたつもりですが……」

カルストンライトオは長い黒髪を指で絡めながら他のトレーナー達を見る。

「皆さん、あまり熱心に見てませんね。普通選抜レースでスカウトするトレーナーは色々持ってますよ？例えばタイムを測るストップウォッチ、レースで注目したウマ娘の名前やその子の特徴を書くためメモやタブレットなんか持つてるのに皆さん手ぶらなんですわね」

「この時期までスカウト待ちの子じゃあまり期待出来ないからな。まあ突然開かれる選抜レースがどんなもんかってのを暇潰しに見てる奴しかいないだろうな」

カルストンライトオはそれを聞くと小さく溜息をついた後に

「……………まあ貴方だけにわかれば充分ですからいいですが」

そうポツリと呟いた。

今から10分ほど前、体操服に着替え終わって更衣室から出ようとしたライオンボスはカルストンライトオに出会った。

「ら、ライトオさん!?!どうしてここに?」

「レース前なので一目様子見をしようと思いましたがね」

そういうとカルストンライトオはライオンボスの目をじつと見る。

「……何も全力で行けとは言いません。普段のレース通りの走りで行ってください」  
「え、あ、はい」

「言いたい事はそれだけです。では頑張ってください」  
カルストンライトオは踵を返してその場を去った。

そこからレース場についたライオンボスは軽いストレッチをしながらカルストンライトオに言われた事について考えてた。

（普段通りに走れって……それだけでいいのかな……でもなんでそんなことでわざわざ私の所に来たんだろう……呼び出された時もそうだけどなんで私の事を高く評価してるんだろう？）

「……どうしたの？」

「あ、カポちゃん？」

「もうゲートインだから、行きましょう」

カポちゃんことカポラヴオーロはライオンボスへそういうとゲートへ向かう。

（カポちゃんもこのレースに参加するんだ……）

そんな事を思いながらライオンボスはゲートインし、両手で頬を叩いて気持ちを投入した。

(……考えるのをやめて、ライトオさんに言われた通りにやる！)

体勢を整えて、今スタートした。

ゲートを出てからはみんな綺麗なスタートを決めて直線、ライオンボスは先頭に立った。

そこから1バ身開いて後続のウマ娘が2人いてさらに2バ身開いて残りのウマ娘は縦長になっていく。

(スタートから最初のコーナーまでの直線、少し普段のレースより長い！)

そんな事を考えていると

(え!?もう最初のコーナー!?)

先頭のライオンボスは最初のコーナーへ入る。後ろのウマ娘は差を縮めようとスピードを少し上げるが差は半バ身縮まるだけだ。

(このコースのコーナー……)

ライオンボスは曲がりながらこの選抜レースのコーナーについてある事に気づき後ろを見る。さっきまでライオンボスを追うように後ろで追走してる2人はスピードが落ちて差が半バ身から1バ身開いた。

それが分かると彼女は少しニヤリと笑う。

「……気づいたようですね」

それを観客席でカルストンライトオは見ていた。さらにライオンボスが気づいた事もわかつている。

(このコースはカーブが小回りになって少し急になっています。カーブが急な分スピードを緩めなければなりません。ですが逃げウマ娘には有利です。何故なら速いスピードで先頭に立っているため息を入れるタイミングがみんながスピードが落ちる小回りなカーブになります。なので、逃げウマ娘は先頭のまま走れます)

その後彼女はライオンボスから沖野トレーナーに視線を移す。

「……先頭のウマ娘、いいペースですね」

「ああ……」

沖野トレーナーは先頭を走るライオンボスに注目している。何かを考え込んでいるのか顎に手を当てている。

レースは最後の直線に入る。後続のウマ娘は差そうとスピードを上げるが、ライオンボスには届かない。ライオンボスはそれを確認して

(このまま、行ける！)

右足を踏み込んでスピードを上げる。差は2バ身と広がってそのままゴールした。

走り終わって息を整えているライオンボスは嬉しかった。何せこれが初勝利なのだ。「やった…やった…！」

ライオンボスは嬉しすぎて声を上げたいが疲れからか声が出せない。しかし、普段のレースよりもスタミナはまだ残っている感覚だ。

(これで私にもスカウトがくッ！)

その時太ももに触られる感触がした。それはやがて太ももを撫で回す感覚へとなっていく。ライオンボスが後ろを振り向くと

「この太ももの筋肉、やはり思った通りだ…かなりスプリンター向きだが…」

「キヤアアアア！」

ライオンボスは太ももを撫で回している沖野トレーナーを思いつき蹴り上げた。

「な、な、何なんですか貴方!?!ち、痴漢!?!」

「おいおい、誤解だ誤解」

沖野トレーナーは蹴られた顔を触りながら立ち上がる。蹴られたせいで鼻血が出ている。

「誤解なわけじゃないですか!?!人の足触っておいて!」

「俺は痴漢じゃねえよ。俺はトレーナーだ」

「え？トレーナー？」

「そうですよライオンボスさん」

ライオンボスは後ろから声をかけたカルストンライトオに驚く。

「その人は沖野トレーナーと言います。彼はチームスピカのトレーナーですよ？」

「ち、チームスピカってあのスペシャルウィークやトウカイテイオーがいるあの!!」

「ええ。あとライオンボスさんに話があるそうですね、トレーナーさん？」

ああと沖野トレーナーは一言言うと

「単刀直入に言うぞ。ライオンボス、お前チームスピカに入らないか？」

その一言にライオンボスは

「え、え、ええー!？」

学園に響き渡るような声を上げた。

## 4話 チームスピカ

選抜レースに勝利して沖野トレーナーからスカウトを受けた次の日、ライオンボスはアフリカンゴールドと話していた。

「私やっとスカウトされたんだよ！チームスピカってところ！知ってる!?あのスペシャルウィークやトウカイテイオーが在籍している凄いチームなんだよ!」

目を輝かせてアフリカンゴールドに話している。

「よかったじゃん。でもチームスピカかあ…」

「どうしたの?」

「いやあ…あのチームなんかその…クセが強いというか…変なチームとして有名だよ?ほら、あのゴールドシップって人も在籍してるらしいし…」

「ゴールドシップ…あまり聞かないなあその人」

「マジ?2連覇してた宝塚記念で出遅れた人だよ。ほら、この人」

アフリカンゴールドはゴールドシップの出遅れの動画をライオンボスに見せる。場内のどよめきと解説者の悲鳴がスマホのスピーカーから聞こえて来る。

ライオンボスはその動画を見ると少し難しい顔をした。

「これがゴールドシップって人かあ……」

「あとさ、結構この人変わってんだよね。学園じやいい意味でも悪い意味でも有名人だ」「そうなんだ。まあでも他にもいるでしょ、メジロマックイーンにサイレンススズカ、あとダイワスカレットにウオツカ。みんな強いウマ娘だし私そんなところに入れるなんて夢みたいだなあ……」

ライオンボスは幸せそうにニヤけている。それを一目見たアフリカンゴールドはすぐ様スマホを見た。

（ボス知らないっぽいな……昨日の選抜レース、実は色々妙だつて事……）

アフリカンゴールドはウマツターに出されていたとある眩きを見た。恐らく昨日の選抜レースの関係者なのだろうと思われるものだ。

『この選抜レース……出走者はみんなスカウトされている。全員だ。奇妙な事に普通1位になったウマ娘にトレーナーが殺到して残りの順位のウマ娘は声をかけられない事が多いのにトレーナーはみんな各ウマ娘一人一人にスカウトへ行った。1位も最下位もみんなトレーナーが一人づつだ。さらにレース参加者や観戦しているトレーナーに黒髪のウマ娘が話しかけてたりしてた。このレース……なんかまるでみんなスカウトされる前提で作られてる出来レースなのでは？○松かな？』

そんな不穏なツイートをしながらライオンボスを見た。ツイートなんか露知らず喜



んでいるのを見て

(ボスには見せない方がいいな…)

アフリカンゴールドはスマホをポケットにしまった。

授業が終わって放課後になり、ライオンボスは昨日言われたチームスピカの部室へ向かった。

ノックして中に入ると中には誰もいなかった。

(誰もいないのかな?)

辺りを見渡すとロッカーが見えて、そこに自分の名前が書かれているロッカーを見つけた。

そのロッカーをライオンボスが開けると

「よおー!」

「うわあ!」

中に芦毛の髪が長いウマ娘がいて、それに驚いたライオンボスは尻餅をついた。

驚いて呆然としているライオンボスにそのウマ娘は話しかけて来た。

「おめーが新しく我がスピカに入るウマ娘だな?名前なんて言うんだ?」

「え?あ、はい!」

「エ？ア、ハイ！つて名前だな。お前中々珍名だなー？アタシの知り合いにもお前みたいな珍名バいるんだよ、名前は確かオレハ」

「違います！私ライオンボスつて言います！今日から新しくチームスピカに入るウマ娘です！」

「え？いや名前知ってるし」

「え？」

「まあ細かい事は気にすんなよ。ところで話変わるけど飲み物いるか？温めた醤油あるけど飲むかい？」

（なんなのこの人!?)

ライオンボスが驚いていると

「なんだか賑やかだねー？どうしたの？」

「もうゴルドシップさん、お辞めなさい。その人が困ってますわよ？」

扉から声が聞こえた。振り返って見るとそこにはメジロマックイーンやトウカイトイオーと言ったスピカのメンバー全員がいた。

「もしかして貴方がチームスピカの新メンバーですか？初めまして。私はメジロマックイーンと申しますわ」

「め、メジロマックイーンさん!?あの長距離で有名な!？」

「あらあら。私の事はご存知のようですね」

「そしてアタシがチームスピカのエースにして、最強、無敵、超ウルトラアルティメットギガンティックのスーパーハイパーウマ娘のゴルシちゃんことゴールドシップ様だ！」

（肩書きが小学生みたい……でも）

ライオンボスはゴールドシップを見た。

（なんかゴールドシップさん、初対面なのに……なんだか昔から知ってるような気がする？なんか運命的というか……）

「おっ？このゴールドシップ様の顔に何かついてるか？ハッ!?もしかしてアタシの美貌に惚れちゃったのか？」

そんなわけないでしょうとメジロマックイーンはツツコミを入れた。そこからライオンボスはチームスピカのメンバー全員と自己紹介をした。

「にしてもスペシャルウィークさんにトウカイテイオーさんもいるなんて……私去年の有馬記念感動しました！」

「へー僕のあのレースみたんだー？」

「はい！あとサイレンススズカさんの毎日王冠にダイワスカーレットさんとウオッカさんの天皇賞も！」

「随分見てるねボスちゃん」

スペシャルウィークがライオンボスに感心していると沖野トレーナーが入ってきた。

「おっお前ら全員来てたのか」

「あらトレーナー？アンタが一番遅いなんて珍しいわね」

「あ、ああ。少し用事があったてな…にしてももう顔合わせしたのか…」

「もう自己紹介も済んだよ？」

「まあもう済ませたなら早いな。今日から新しく来たライオンボスだ。みんな仲良くしてやってくれ。あとボス、お前からみんなへ一言何かあるか？」

「ええつと…と、とりあえず皆さんよろしくお願ひします！」

スピカのメンバーは拍手をした。

「困った事があつたら私になんでも聞いてね！」

「スペちゃんからは食堂のメニューのオススメ聞いた方がいいよ」

「ええ!?!それ以外でも聞いて欲しいですよ!?!ほら練習とか」

「練習以外でも何でも聞けよ？悩み相談なら俺に任せな」

「ウオツカに聞いてもダメよ。アタシに任せなさい」

「おい何でだよ！俺だろ！」「ハアア!?!こういうのはアタシなの！」「いや俺だ！」「アタシ！」「いや俺だ！」

チームスピカの部屋は随分と賑やかになった。みんながワイワイ話している中で沖

野トレーナーは何かを考え込んでいた。その目線の先にはライオンボスがいた。

「……………トレーナーさん？どうしたんですか？」

サイレンススズカが沖野トレーナーに声をかけるとハツとした後に

「あ、ああ何でもない。さあ練習するぞ練習。今日のメニューはテイオーとボス以外は自由に決めてくれ。じゃあライオンボス」

「は、はい！」

「お前についてはメニューを決めている。何故ならレースを2週間後に入れているからな。お前はこのレースに向けてトレーニングをしよう。テイオーと一緒にやってくれ。テイオー、頼んだぞ」

「任された！じゃあボスちゃん着替えたらやろうか」

「はい！よろしくお願いしますテイオーさん！」

「ワガハイに任せたまえ！この皇帝トウカイテイオーがビシバシ鍛えるもんね！」

こうして2週間ライオンボスはトウカイテイオーとトレーニングした。他にもトウカイテイオー以外のチームスピカのメンバーのトレーニングに混ざった。準備万端で迎えた2週間後の中山競馬場で行われたライオンボス初出走のレースは

16人中7着で敗北し、次に出走したレースは12人中8着と負けてしまった。選抜レースの勝ちが嘘みたいにならなかつた。

## 5話 特訓

トレーナー室で沖野トレーナーはライオンボスの出場したレースの映像を見直していた。

出場した2つのレースでは出遅れが原因で敗北した。

「出遅れ癖があるのか…？いや選抜レースでは綺麗なスタートが決めれたのが謎だがあれはまぐれなのか…？」

ライオンボスの事で頭を悩ませているとふとある事を思い出した。それはライオンボスをスカウトする前にカルストンライトオが話した事だ。

『彼女は私が見る限りまだ本格化してませんので…適正距離がとても短いです。なので今後を見据えて柔軟性を鍛えた方がよろしいかと』

その言葉を聞いて沖野トレーナーは前屈で記録を持つほど柔軟性があるトウカイテイオーをつけてトレーニングをした。

しかし、体に柔軟性が生まれる事はなく今回のレース結果となった。

今後のトレーニング方針を変えようかなと考えているとトレーナー室のドアが勢いよく開かれそこにいたのはゴールドシップがいた。脇にズダ袋のようなものを抱えて

いた。そのズダ袋はモゾモゾ動いている。

「トレーナー、函館に行くぞ」

「……………え？」

「函館に向かう道中にズダ袋の中身が開かれそこにいたのはライオンボスだった。

「何するんですか!?! てかなんで車の中にいるんですか!?!」

「まーまー細かいことは気にするなっつて」

「後ろで騒ぐなよ……………運転に集中出来ないだろ…」

「トレーナーさんいたんですか…それよりも今からどこに行くんですか?」

「函館」

「え?」

ライオンボスはキョトンとした。

「え? いやなんで急に? 私明日も授業とか色々あるんですよ?」

「あ…そこに關しては安心してくれ。トレーニングの兼ね合いで遠方に行くつて学園側に事情を話してある。許可は取つてある」

「何の目的で行くんですか? 先週レースで行つたばかりなのに…」

「そんなもん決まつてんだろ! 函館競バ場でトレーニングするんだよ!」



ゴールドシップはライオンボスの肩を叩いて言った。

「はあ…」

「着いたら説明してやるよ。だからしばらく待つてくれ」

「到着するまでしりとりしようぜ？ 私からな？ しりとりのだからリンカーン！」

「もうしりとり終わってますよ…」

トレーナーの運転で2日かけてトレセン学園から函館競バ場に到着した。平日なので競バ場には観客などの人はいないがウマ娘のトレーニングのため開放している。ゴールドシップとライオンボスは体操服に着替え、地下道を通ってレース場へ向かった。

「いやー途中のホテル楽しかったなー！ボスとの女子会楽しかったぞー！」

「ゴールドシップさん…アメリカの地名で山手線ゲームする女子会はないですよ…それよりも着いたんですから説明してください！なんでわざわざ函館競バ場に来たんですか？」

「んなもん練習に決まってるんだろ？それに今週も函館でレースだろ？ちようどいいじゃねえか」

「練習するのはわかりますがなんでわざわざここに？」

「それについては俺が説明する」

前から声をかけられたので前を見るとそこに沖野トレーナーがいた。

「今からやるのは模擬レースだ。ゴルシとボスでレースをしてみよう」

「ご、ゴールドシップさんですか!?!」

「ああ。練習はゴルシに勝ったら終了だ」

「ええ!?!無理ですよ!?!私じゃ勝てないですよ!」

「んなもんやってみねーとわかんねーだろ?というわけで」

ライオンボスはゴールドシップに首根っこを掴まされてゲートに引きづられた。

「そんなの無理ですよ!」

模擬レースは案の定ゴールドシップが毎回勝っている。毎回最初のコーナー辺りで捕まってそのまま抜かされてゴールドシップされている。ゴールドシップは息一つ切らしてないが、ライオンボスは肩で息してへろへろである。

「よーし、もう一回だな」

「ハア……ハア……」

何回走ったか回数にはわからない。実力が違いすぎて勝てないのだ。

そしてまたゲートインをし、スタートする。

しかし、今回は違った。ゴールドシップが出遅れてスタートし、ライオンボスは綺麗にスタートダッシュを決めた。

そのせいで差が広がっている状態でレースが始まった。

(やっとゴールドシップさんから逃げ切る形でスタート出来た。でも…)

やはり実力のあるウマ娘である。ゴールドシップはスタートの遅れを取り戻そうと差を縮めに掛かる。その差は半バ身ほどになり、最初のコーナーへ入った。

しかしそこからまた差が広がった。ゴールドシップはコーナーを曲がるため減速したのだ。それを好機と捉えてライオンボスは少しスピードを上げる。

(このレース……まるで前の選抜レースみたい……あの時みたいなら……いける！)

第4コーナーに差ししかかるところでライオンボスはスピードを上げた。ここでリードは3バ身ほど離れたが

「逃がすかあ！」

ゴールドシップは追い上げにかかる。差は段々と縮まり2バ身、1バ身、半バ身と縮め、残りクビほどの差になったが、その時にはゴール板に着いていた。

結果はクビ差でライオンボスの勝利となった。

「ハア……ハア……やった……勝った！」

「チエー。ゴルシワープが通じないなんて〜」

遠くで観戦してた沖野トレーナーが近づいてきた。

「ボス、ようやく勝ったな」

「はい！」

「なんでゴルシに勝てたんだ？」

「え？それは……スタートを綺麗に決めれて、尚且つ逃げ切ったから……？」

「そうだ。しかもスタートは最初よりもだいたい良くなったな。しかも何回も走った成果でだいぶレースの感が掴めてきてた。だから勝てたんだ」

その時ライオンボスはハツとした。

「まさかトレーナーはそのために……」

「この感覚を忘れるなよ？じゃあ着替えてまた合流しよう」

「はい！ありがとうございます！」

ライオンボスはゴールドシップと共に更衣室へ向かった。

「……選抜レースもそうだったが走り慣れた場所なら、自分の力が出やすいタイプなんだな……函館でレースがあるから今回走り慣れるためにこの練習をした甲斐があったな

……」

「アタシが提案したおかげだな！」

「ああ、その通り……ってなんでゴルシがいるんだよ！」

そうして日曜日、ライオンボスの3回目のレースを迎える事になった。